

青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

第8回

奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

第6章 屯田兵創設と西南戦争

弱体だった北海道の防衛体制

屯田兵の「屯田」という名は、中国からきている。漢の武帝が匈奴を破り、西域の各国に田卒を置いたことが始まりで、ロシアのコザック兵の屯田も有名である。

わが国では、寛政12年（1800）に鶴川と白糠に入植した武州八王子同心の子弟30余人が、屯田兵の先駆けといわれる。

明治維新後、わが国の北方防衛の必要性はますます増大していたが、北海道（旧蝦夷地）の防衛体制はきわめて貧弱であった。

開拓使が置かれた明治2年当時、開拓使は旧幕府からわずか1中隊の箱館府兵（「函衛隊」と改称）を引き継いだのみ、といった有様であったのだ。

こうした弱体を少しでもカバーするべく、羅卒制度（警察制度）も設けられたが、焼け石に水であった。

そうしたなか、明治6年（1873）、樺太の函泊でロシア兵による暴行事件が起きた。

またこの年、国内でも漁民による暴動（いわゆる「檜山騒動」）が発生した。これは檜山の漁民が減税を嘆願して、徒党を組んで乱暴に及んだものだが、清隆は青森の鎮台からの軍隊の出動を要請し、やっと鎮圧する始末であった。

一方、国内には維新により禄を剥がれた多くの失業士族があふれ、社会不安の種となっていた。

参議の西郷隆盛もこの問題を深く憂い、一時は腹心の桐野利秋（薩摩）に命じて、北海道に鎮台

をおくための調査をしたほどであった。この構想は結局実現に至らなかったが、清隆は、

（屯田兵構想は、崇敬する西郷の意志である）と固く信じていた。

新しい日本の発展のうえで、北海道の開拓と北方防衛は、ますます重要性を増しつつあった。屯田兵制度は、こうした3つの目的—北方防衛、士族救済、北海道開拓—を満たす政策として、大きくクローズアップされてきていた。

屯田兵を創設

明治6年（1863）11月、征韓論で西郷隆盛らが下野したあと、清隆は岩倉具視右大臣に対して、屯田兵創設を建議した。

この建議は大久保利通の支持を受け、12月に承認された。

これを受けて、清隆はケプロンにはかり、またロシアのコザックの制度をも参考にして、着々と準備を進めた。

翌明治7年（1864）6月23日、清隆は陸軍中將となり、同時に開拓次官と屯田憲兵事務総理を兼ねた。（8月には参議に列し、開拓長官に昇任）

この年の1月に、榎本が一躍海軍中將となったほどの栄進ではなかったが、それでも西郷隆盛（陸軍大將）を除くと、山県有朋、西郷従道に次ぐ3人目の陸軍中將であった。

久しく軍部の主流派からはずれていた清隆にとって、山県中將と並び立つことができたことは本望であった。

ただ、この発令にからんでは、奇妙な経過があった。

当初、陸軍卿の山県有朋中將は、「清隆については、軍功に照らして『少将兼開拓次官』が適当である」

と答申した。

しかし6月23日、清隆は、

「兼任陸軍中將」

として発令された。これは次官は2等官であるため、中將に相当するからである。

しかし、これが問題になった。同等官では武官が文官に優先する建前だったのだ。

清隆は山県と対等に、「陸軍中將が本官で、本務の開拓次官が兼官」という奇妙な形式になり、25日付で式部長から各省に対して通達を変更し、清隆の辞令も、



山鼻屯田兵の像(山鼻日の出公園)

「兼任開拓次官」と差し替えられたのである。

明治8年(1875)3月に屯田兵事務局長に大山重、幹部として准中佐に永山盛弘、准少佐に永山武四郎が任命された。

5月、札幌郡琴似村に第1大隊第1中隊が、翌年には山鼻村に第2中隊が入地した。1中隊は240

人で編成し、給与地を開墾しながら、練兵に従事した。

このころ、日本とロシアの間に樺太千島交換条約が結ばれたが、無防備の大地を負う屯田兵の責任は重大だった。平常時の任務は治安維持にあった。

開拓使末期には、樺戸集治監かぼとしゅうじかんを開設し、多数の凶悪犯を収容したが、彼らはしばしば集団脱獄をして住民を脅やかしたので、屯田兵はこのような施設への備えでもあった。

屯田兵はまた、開拓者を襲うヒグマを処理したことも、再三であった。冬季、野外演習をかねて、勇払方面の鹿猟の取締りをしたこともあった。

警察には取締りにくい密猟者も、突如出動してくる屯田兵には、大いに恐れをなした。

屯田兵の体制は次第に増強整備され、明治37年(1904)に廃止されるまで、約30年間にわたり北海道に定着していく。

この間、最終的には道内各地に37の兵村が建設され、約7千3百戸・4万人もの入地が実現し、北方防衛や北海道開拓などに大きな足跡を残した。

しかし、屯田兵が先ず軍隊として実力を試されるのは、後述する西南戦争のときである。

家庭の崩壊

話が前後するが、明治6年(1873)2月24日、清隆はかわいがっていた長男一はじめを病で失った。

一家が本籍を北海道に移し、移住する話が決まったころのことで、清隆の心にはぽっかり穴が開いたようであった。外では華やかな行事などで紛れていても、帰宅すれば、脱力感、虚無感さいなに苛

まされる現実が待っていた。

このころから、もともと身体が丈夫でなかった妻の清は、体調不良を訴えて気弱になり、北海道移住のことをこぼした。

10月、征韓論の問題が紛糾し、西郷がこれに敗れて鹿児島に帰ったが、清隆は大久保利通に目をかけられ、政府部内にとどまった。

明治8年(1875)の春になり、清隆夫婦には待望の2番目の子供、長女つるが誕生した。

清隆は、「鶴は千年」との思いが込められた名をつけ、いっそうかわいがった。家庭では何かと暗い面の多かった清隆にとって、このつるは唯一の救い、希望であった。

このころ結婚した友人の森有礼ありのり(薩摩、外務大丞)らとともに、女子教育にも熱心に取り組んだ。

翌年2月末ころ、清隆は、井上馨とともに全力を傾けて交渉に当たってきた日朝修好条規の締結が成り、疲れた足取りで帰宅した。

清隆邸の前には、伝え聞いた大勢の人々が群がり、凱旋將軍さながらに出迎えてくれた。

しかし門を一歩くぐると、そこに出迎えたのは、愛する長女つるの小さな位牌いはいと悲嘆にくれた清の青白い顔であった。

つるは、条約締結の4日前、すでに死亡していたのだった。清隆の心は再び激しく打ちのめされた。

妻の清も、その悲しみの余り、いっそう体調を損なっていた。もはや誰がみても、肺を患う病人であった。

3月27日、明治天皇は日朝修好条規の全権大使清隆と副使井上馨の労を慰める宴を催した。

清隆は、ふだんは天皇のひと声で、何をおいても駆け付ける律儀さを持っていた。

しかしこの日の清隆は違った。天皇以下、大臣参議を1時間以上も待たせたあげく、

「ひどく疲れて出席できない」

という前代未聞の書状を届けたのである。

このことは、誰もが「非礼」と思ったに違いない。ただ、そのころは明治天皇自身が皇子、皇女を生後いくばくもなく亡くされており、清隆の心境を誰よりも理解されておられたとも考えられる。

清隆は、深く妻を愛していた。彼はその思いと、この悲しみの底から立ち上がろうという気持ちのなかで、もがき苦しんでいた。

苦悩する日々が続くなかで、ある日突然、妻清の妹百子（9歳）を養女に迎え入れることを思いついた。その瞬間、目の前の霧がすーっと晴れたように感じた。

清隆は、これを実現しようと、手を尽くした。

このことが成り、その家庭には、明るい光が差し込んだように見えた。

西南戦争に参戦

清隆の敬愛する西郷隆盛が征韓論に敗れ、郷里の鹿児島に帰ったのは、明治6年（1873）10月のことであったが、清隆は西郷の身の振り方を大いに心配した。

故郷での西郷の周辺が日増しに不穏になりつつある、との情報を聞いて悩んだ。

現に、自分の部下である屯田兵の永山盛弘准中佐（薩摩）らが、私事にかこつけ、鹿児島などに帰郷したまま西郷一派に身を投じており、在道の薩摩出身者の中にも、自分の進退に迷うものが出てきていた。

清隆は、北方に目を向けてほしいと考え、そのことを西郷に進言したこともあったが、願いに反して、西郷の周辺にいる薩摩人の氣勢は、日ごとに高まっていった。

明治10年（1877）1月30日、鹿児島で私学校生たちが集団で決起し、陸軍火薬庫などを襲った。これが「西南戦争」の発端になった。

このころ、鹿児島から遠く離れた庄内地方にも、きな臭い問題が横たわっていた。

旧庄内士族の間には、前述したように、先の維新戦争で庄内藩が降伏した際、西郷隆盛から寛大な処置を受けたことから、西郷崇拜の雰囲気非常に強かった。

このことから、鹿児島で西郷らが乱を起こせば、これに連動して庄内でも決起する恐れが強かったのだ。

かって清隆のもとで活躍していた元開拓判官松本十郎（庄内）が、前年7月、清隆の樺太アイヌにかかわる政策に反発して辞表を出し、故郷庄内に戻っており、彼を中心とした不穏な動きが出ないかとの懸念などもあった。

このため新政府は、多数の密偵を庄内に放ったりして、警戒を強めていた。

2月14日、清隆はこのことを憂えて、みずから

旧庄内士族の指導者松平親懐、菅実秀らに手紙を送り、

「くれぐれも西郷らに同調しないでほしい」と要請した。

その翌日の15日、西郷は私学校生など周囲の者に担がれて、

「政府に尋問の廉がある」として鹿児島で決起した。

西郷の率いる薩摩軍1万5千人は、東上して新政府の九州鎮台のある熊本城に向かった。50年ぶりといわれる大雪の中での行軍だった。

熊本に着くと、すぐ熊本城を取り囲んだ。

熊本城の主将は谷干城（陸軍少将、土佐）で、彼の指揮のもと少数ながら防備が固められ、城は容易に落ちなかった。

19日、新政府は「賊徒征討令」を発令、それとともに有栖川宮熾仁（公家）を征討総督とし、山県有朋、川村純義を参軍に、野津鎮雄を第1旅団、三好重臣を第2旅団の司令長官に任命し、動員令を各鎮台に下ろして諸兵を福岡から南下させ、熊本城の急を救おうとした。



谷 干城（国立国会図書館蔵）

実は、清隆のライバル山県にとっても、清隆の場合と同様、西郷は非常にやりにくい相手であった。

一般に、長州人は西郷を含む薩摩人に好感を抱いていなかったが、山県の場合は違った。というのも、これまで西郷には大きな恩義があった。

西郷は軽輩だった山県に対して京都の薩摩藩邸に匿ったり、島津久光に会わせたり、海外留学に助力したりして数々の気配りをしていたが、とくに山県が陸軍大輔・近衛都督時代に、山城屋事件で汚職の嫌疑をかけられたとき、その窮地を助けられていたのだった。

こうしたいくつかの人間模様を飲み込みながら、新政府軍の征討作戦は進行していった。

実質的な総指揮は、内務卿の大久保みづからが執った。

23日、京都の大本営から清隆に至急の出頭を命ずる電報が届いた。それは薩摩軍を討つように、との命令が下ることを意味していた。

このとき清隆は36歳であった。養女の百子は、清隆が一室で妻の清と静かに対座していたことを、おぼろげに記憶していた。

(武士の出陣にならって、水盃を交わしていたのだらう)と思った。

清隆自身は、このとき、自分が戦地に赴くこと以上に、病弱な妻の身体のことを心配していた。

清隆は、勅使柳原前光^{さきみつ}を護って鹿児島に行き、島津久光を説得するという使命を帯び、玄武丸で鹿児島に乗り込んだ。

久光は不機嫌で、清隆を部屋に入れず、その名を呼び捨てにした。久光からすれば、今度の維新は自分の描いた形ではなく、

(余は、西郷と大久保にだまされた)と無念でならなかったのだ。

清隆は中将の服のまま廊下に控えて、隠忍自重した。

清隆の配下には2千5百人の兵がいたが、ここで久光恭順^{きやうじゆん}のことを確かめると、すぐに大山綱良鹿児島県令を拉致^{らち}して、城下に一兵も残さず船を北上させ、薩摩軍占領地を偵察しながら長崎に入った。

清隆は、早急に鎮圧するために、陸軍中将としての自分の手腕を発揮しようと決心していた。

一方、山県有朋の率いる新政府軍正面軍は、激戦の末、吉次峠を抜いたが、田原坂における薩摩軍の捨て身の抵抗にひるみ、戦線は全く膠着^{こうちやく}状態に陥った。

しかも熊本城の危機は迫り、一刻の猶予も許さなかった。

清隆は、3月13日、京都の新政府中枢(行在所)あてに1通の文書を電送した。

箱館総攻撃の日、箱館山の背面から奇襲を行ったのと同様、衝背軍による「背面攻撃」によって熊本城の囲みを解く作戦を建言したのだ。

この作戦は、長州の木戸孝允や山田顕義の全面的な支持を受けた。このころ、木戸は病床にあって、事態を憂慮していたのだった。

まもなく、清隆は征討参軍に任ぜられ、

「兵隊、巡查隊を率いて肥後海より賊背征討を委任す」との命令を受けた。

山県の正面軍は、17日間にわたる田原坂の戦闘

のあと、20日早朝、ようやくこれを突破した。

しかし薩摩軍は、全面崩壊せず、田原坂後方の木留^{きどめ}、植木^{うえき}の線に防御線を後退させて、なおも頑強に持ちこたえた。

戦局の大勢を決したのは、清隆の率いる衝背軍の行動であった。

清隆は高島軻之助大佐(薩摩)の兵に警視庁巡查隊千2百人を合わせて、「別働第2旅団」を編成し、約4千人の兵力で、17日から行動に入った。

まず玄武丸を島原付近に回航させて、あたかも上陸するかのよう陽動作戦をとらせ、その間に高島部隊を八代近傍に揚陸させることに成功、直ちに薩摩軍を撃破しながら北進して宮の原を先制した。

このとき上陸したのは、黒木為楨中佐^{ためもと}の率いる2個大隊と巡查隊5百人である。玄武丸、矯竜丸は、海上から薩摩軍を砲撃した。

25日には薩摩軍は北走を開始した。薩摩軍はほとんどの兵力を田原坂や熊本城包囲に割いており、後方はがら空きだった。

清隆は罹災した住民を救助し、薩摩兵^{しかばね}の屍をていねいに葬った。

清隆の衝背軍は、さらに進んで小川を占領し、松橋^{まつばせ}を猛攻した。

新政府軍参謀本部編集の「征西戦記稿」には、「黒田参軍頻りに将士を励まし、石井権中警視をして令を山田少将に伝へ、急襲を要求し、其の機に乗じ右翼の潮水を冒して進み、又安田開拓権大書記官をして孔道の壘を衝かしむ。安田乃ち喇叭手^{らっぱ}をして銃槍を挿み前進し令を伝えしめ、率先刀を揮って賊軍を突く」

と、激戦の様子が描かれている。

戦いの焦点は、松橋の北、御船の攻防に移った。このころ、永山盛弘准中佐は、戦況の不利を悟ると、周囲の仲間^{みふね}に別れを告げて従容として民家に入り、自刃している。

profile

奥田 静夫 おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男—松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞(雑誌「クオリティ」同年4~12月号連載)。
